

国内経済

高付加価値製品も海外生産が進む電気機械産業

国内景気の低迷が続く中で、製造業生産拠点の海外移転、消費財・生産財の国産品から輸入品への代替が進み、製造業の空洞化を懸念する声が高まっている。今年度4～9月期の輸出は数量ベースで前年同期比 120%と大幅に減少し、特に中心である電気機器は、金額ベースで 21.5%と急減している。これに対して輸入は、数量ベースで 27%とわずかな減少にとどまっている。

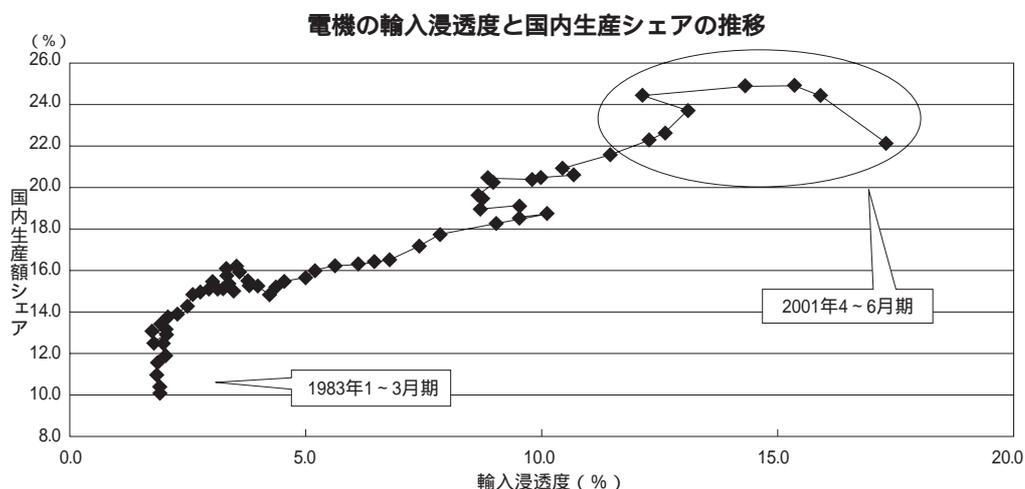
この動きを、企業の販売する製品のうちどのくらい輸入品があるかを示す「輸入浸透度」の推移で見てみよう。下の図は、電気機械工業における輸入浸透度を横軸に、鉱工業生産における電機の国内生産シェアを縦軸にとったものである。電機の輸入浸透度は80年代からほぼ一貫して上昇してきたが、同時に電機の国内鉱工業における生産額シェアも上昇している。これは、輸入の増大が国内生産を圧迫することなく、電機メーカーは国内では高付加価値製品、海外では低価格品と、内外の生産を使い分けていたことを示唆している。

しかし2000年7～9月期には国内生産シェアは横ばいにとどまる一方で、輸入浸透度が上昇し、企業が国内の生産はほとんど増やさずに、

海外での生産を増やすという動きが顕著になった。さらに2001年1～3月期からは、輸入浸透度が上昇したにもかかわらず、国内生産シェアは減少に転じ、国内生産拠点を閉鎖して、海外に移転したり、国内でつくる製品の代替として海外から輸入する動きが活発になっていることを示している。

中国等の生産技術力が向上し、これまでは国内で生産していた比較的高付加価値の製品でも、海外で低コストでつくられるようになってきたことが考えられる。国産品の競争力を維持するためのコスト削減が限界に達しつつある可能性もある。

鉱工業生産統計は、調査対象品目の入れ替えが5年ごとに行われるため、その後に急速に生産が増えた製品等は統計に反映されにくく、また数量をベースにした統計のため、製品の高付加価値化が統計に現われにくい点も考慮する必要がある。しかし国内の製造業は、国際競争力を維持するために、これまで以上に製品の高付加価値化を目指さなければ、海外生産シフトに代わる国内生産品がないという空洞化の進展、国際競争力の喪失による企業収益の圧迫に追い込まれることは必至であろう。（名倉 賢一）



資料 経済産業省「鉱工業総供給表」

(注) 輸入浸透度 = [(輸入指数) × (輸入ウェイト)] ÷ [(総供給指数) × (供給ウェイト)] × 100 (%)
 生産額シェア = (電機生産指数 × 電機ウェイト) ÷ (鉱工業国内生産指数 × 国内ウェイト) %